The Japan Society of Educational Sociology

文化的実践としての不登校Ⅱ

－父親の「語り」を中心に－

青田泰明（慶應義塾大学大学院）

＜キーワード＞
不登校　文化的志向性　父親不在　中間層家庭
自主性重視志向

＜要旨＞
本稿では、多様化傾向にある不登校形態の中から、全体の約7割を占めるとされる「怠学」「無気力」型の不登校（森田 1991）に着目し、それを「文化」という社会学的視点から考察していく。具体的には、父母に身体化された「学校・教育志向性」、すなわち「学校・教育に関わる文化的志向性」が子どもの登校意欲に及ぼす影響について考察していく。その際、分析対象となるのは、2004年7月から不登校経験者とその親に対して継続的に実施している、不登校経験と生育環境に関する聞き取り調査に基づく「語り」である。そこでは、父母が自身の生育環境において身体化した「学校・教育に関わる文化的志向性」や、具体的な子育て方針を持たない中で父母が抱く「自主性重視志向」が、子どもの不登校の選択に大きく関わっていた。

また、不登校研究において「父親不在」はもはや常套句化しているものの、本調査データからは、母親を媒介として子育てに間接的な影響力を保持する、「不在という存在」の父親の姿が確認できた。そしてそのような「不在」というあり方は、父親自身の生育環境における経験に起因していた。

1．問題の所在

学校環境や教育制度に批判的な社会的文脈の下、不登校研究においては家庭要因よりも学校要因が重視される傾向にある。しかしながら、そのような「学校」という「場」に対する適応能力自体が、そもそも「家庭」という「場」で培われる部分が大きいことを考慮すれば、家庭要因の重要性もまた自明のことと思われる。

従来の家庭要因論においては、母子関係に分析視角が集中する一方で、父親は「不在の人物」「消えた存在」としてアプリオリに設定される傾向にあった。「夫婦家族といえども、実質的には、母子家庭となっているのが、子どものいる日本の家族の現在」（渡辺 1999：176）と渡辺が指摘するように、「女性の二重負担」が新たな性別役割規範として生起している現状においては、そのような父親に対する分析はもっともなものと思われる。

しかしながら、「日本の父親は仕事人間で子育てにかかわらないと言われるが、より正確には、かかわり方が直接的でなく間接的」（舩橋 1999：91）であるとも考えられ、そのような視点に立てば、現在の不登校研究においては、常套句化した「父親不在」というタームによって、不登校問題に直面する家族成員間の複雑なダイナミズムが無自覚にも隠蔽されてしまっているともいえるだろう。

これまで筆者は、自身が継続的に実施している不登校児とその母親に対する調査から、母親に身体化された「学校・教育に関わる文化的志向性」が、子育て行為を通じて、子どもの学校観や登校意欲に無意識的に影響を及ぼす可能性を指摘してきた。そこで本稿では、不登校問題において消失した父親の存在と役割に対する再考を目的とし、「文化」という社会学的視点に基づきながら、分析・検討を試みていく。

具体的には、父親に身体化された「学校・教育に関わる文化的志向性」と不登校との関係について、父子関係・夫婦関係に着目しながら、三者の「語り」を基に分析・検討を試みる。また、分析対象となる家族は、その父親職業から経済的には中間層に位置づけられると考えられ、高度経済成長期を経て膨張した中間層の文化的特徴についても、分析・検討を試みる。

2．調査の概要

調査方法は、半構造化面接の形式を取った聞き取り調査であり、その対象者は、神奈川県在住の不登校経験児とその父母、2組計6名である。調査は、2005年8月に、調査対象者が指定する場所に筆者が赴いて実施した。所要時間は一人あたり約90～120分であった。インタビューは、親子それぞれに対し、幼稚園時代から現代までの経験を、保有した遊具の種類や塾・お稽古ごとの経験の種類、両親の思い出など、具体的質問項目を交えながら聞き取る形で進めていった。また、本研究は

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

そのサンプル数とサンプリング方法の面から一般化可能性を志向したものではなく、あくまで仮説発見型の研究として位置付けられるものと考える。

3．分析結果

本調査データからは、学校や教育に対してそれほど価値を見出さない父母の姿が見て取れた。またそのような価値や志向性は、彼ら自身の生育環境における子育て経験に起因しているように見受けられた。そして、そのような父母の「学校・教育に関わる文化的志向性」は、子どもの学校観や登校意欲に影響を及ぼし、また父母の不登校に対する認識や、その初期対応にも影響を及ぼしているように思われた。長岡（1995）が「子どもが、学校についてこのようにネガティブなカルチャーの中に育った場合、子どもの学校や教師に対する態度にそれが現われたとしても不思議はない」（長岡 1995：146－147）と述べ、小林（2002）が「家族が学校価値を高く評価している場合は、本来、学校に子どもを押し出す『斥力』とでも呼べる力は強い。（中略）反対に、家族が学校価値をそれほど重視しない場合には、学校に押し出す力は弱くなる」（小林 2002：86）と指摘するように、子どもが生育環境において身体化した「学校・教育に関わる文化的志向性」と不登校行為との関係には、近年注目が集まりつつある。そして、本調査データが示唆しているように、そのような志向性が父母の定位家族の文化に起因するものであるならば、家庭の文化的要因に焦点化する不登校分析は、より重要な知見と意義を提供するものと思われる。

また、調査対象である2組の父母たちは、具体的な子育て方針を意識しておらず、逆に、自主性重視という現代の社会的風潮に則する傾向にあった。そして、そのような志向性も、不登校生成に大きく影響を及ぼしているように思われた（父母は、子どもの不登校を「子どもの自主的選択」として捉え、容認する傾向にあった）。石川（2000）は、「一九八〇年代後半から始まった『やさしさ』ブームは、結果として大量の不登校を発生させた」（石川 2000：39）と指摘し、子どもの意思の尊重が登校復帰に繋がるとする近年主流化しつつある不登校理解を問題視している。子どもの自主性や意思を尊重する「やさしさ」は、子どもの人権にとって極めて重要な思想であることに間違いは無い。しかしながら、現代社会においては、地域社会に子育ての補助機能を求めることは難しく、その責任・負担のほとんどが親に求められている。そのような状況下で、子どもの子育てに対し具体的方針や戦略を持たず、「自主性重視」という曖昧で漠然とした考え方を子育て行為に投影することは、無自覚的な放任にもつながり得ると思われる。

また、「子どもの不登校」という事態においても尚、実質的な子育て・ケア主体は母親であり続けていたことも明らかとなった。しかしながら、そのような子育て・ケア内容の大まかな方向性については、未だ父親が最終的な決定権を有していた。子どもからは「消えた存在」として語られ、母親からは「物足りない存在」として語られる中でも、父親は「不在という存在」として不可視的な存在感を保持していることが見受けられた。そして、そのような「不在」というあり方は、父親自身の生育環境における経験に起因しているように思われた（父親は、「不在がちな父親」をロールモデルとして取り入れていた）。

高度経済成長期を経て、生活水準の絶対的格差の大幅な縮小・均質化が達成された現在、そのような経済的平等によって隠蔽されている中間層内の文化的変容にも着目する必要があるだろう。

不登校現象に対する父親の存在と影響力は、決して「不在」というタームにのみ収斂されるものではない。父親がその生育環境において身体化した「学校・教育に関わる文化的志向性」や「子育てに対する取り組み方」と、子どもの不登校行為との関係に目を向けることは、新たな不登校理解の可能性、新たな不登校援助の可能性を示唆することにも繋がるだろう。また、子どもの「学校・教育に関わる文化的志向性」が生成されるダイナミズムを把握するためには、従来のような母子関係、父子関係、といった二者関係に限定した視点ではなく、「子ども－母親－父親」といった三者関係に目を向ける必要があるだろう。

＜主要参考文献＞

舩橋恵子　1999.「父親の現在－ひらかれた父親論へ」，渡辺秀樹編『シリーズ 子どもと教育の社会学 3　変容する家族と子ども－家族は子どもにとっての資源か』教育出版

石川瞭子 2000.『不登校と父親の役割』青弓社

小林正幸　2003.『不登校児の理解と援助－問題解決と予防のコツ』金剛出版

森田洋司　1991.『「不登校現象」の社会学』学文社

長岡利貞　1995.『欠席の研究』ほんの森出版

渡辺秀樹　1999.「変容する社会における家族の課題」，渡辺秀樹編『シリーズ 子どもと教育の社会学 3　変容する家族と子ども－家族は子どもにとっての資源か』教育出版

NII-Electronic Library Service